夕刊フジ　2022年7月2日（1日発行）

# ニッポン臨終図巻

ドクター和の

261　コラムニスト　小田嶋隆

## 「晩年」は当事者の言葉ではない

6月30日で僕は64歳になりました。来年は高齢者の仲間入り。これからは自分のやりたいことを優先して生きようと思います。その手始めとして先日、神戸の老舗ライブハウス・チキンジョージでライブをしました。もしかしたら僕の死後、「晩年は、医者よりも歌を優先し不真面目だった」と書かれるかも…それでも構うもんかと、この方が日経ビジネスに書かれたコラムを読み強く思いました。少し長いですが引用しましょう。

〈「晩年」は、観察者の言葉であって当事者の言葉ではない。

どういうことなのかというと、他人の人生を観察なり整理している人間が、生まれた時期と死んだ時点を確認した上で、死亡時から逆算した最後の数年間に「晩年」というタグを貼り付けているだけで、生きている当人は、特段に結末を意識していないということだ〉

これを書いたのは名コラムニストの小田嶋隆さん。6月24日にお亡くなりになりました。享年65。「病気のため」とだけ発表されており、病名は明かされていません。きっと、「晩年」という言葉同様、「死因」も、当人は別段意識することなく死ぬものなのだ、というご本人の意思を汲んでのことなのでしょう。

僕が小田嶋さんに興味を持ったのは、2018年に出版された『上を向いてアルコール』（ミシマ社）という本を読んだからです。小田嶋さんは、30代のときにアルコール依存症となりました。連続飲酒発作（飲んで酔っては寝て、起きるとまたすぐ飲んでしまう状態）を起こし、幻聴も聞こえ始めます。それでも点滴を打ちながら飲酒していたと。しかし、医者から「40で酒乱、50で人格崩壊、60で死にますよ」と言われ、治療に向き合い、断酒をされました。

僕は常時、数人のアルコール依存症の方と在宅医療で関わっていますが、一度そうなると、酒を断つことは決して容易ではありません。この小田嶋さんの本は、当事者の心理を学ぶにあたり大変参考になりました。

現在、我が国にアルコール依存症は推定100万人以上いると言われていますが、その内、治療を受けているのは5万人ほど。この病気は別名「否認の病」と言われており、病気の自覚が本人にはないからです。

しかし、小田嶋さんはその後もお酒をやめ続けられた。「酒以外の依存先」を見つけて人生を再構築せよ、と本にはあります。

人は皆、何かに依存しなければ生きられないもの。一つに執着するではなく、ちょっとずつ色々な依存先を見つけることが、楽に生きるコツかもしれません。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。